

閉鎖病棟



小城ゆり子

(1) 実社会に出て

昭和四三年春、私はやっと大学を卒業した。病気と学業不振のため、二年も留年した結果だった。卒業の頃、私はうつ病になりかかっていた。その少し前に、躁病で高橋病院に入院していた。それはよくなったが、反動でうつ病が始まろうとしていた。躁病とうつ病の間の、ごく短い正常な時期に、私は東京エクスプレス社の入社試験を受けた。ごく簡単な面接で、入社できた。

「あまりに簡単過ぎて、不安だわねえ」と、世話してくれた大学の就職課の人が不安がった。

ガデリウス商会の方は、どうせダメだろうから、と私は始めからあきらめていた。卒業の少し前にスウェーデン系の会社、ガデリウス商会の筆記試験を受けていた。ここは筆記試験のほか、コンピューターによる性格審査があり、「当社は、面接はしません。合格通知も出しません。四月中に不合格通知は出します。ですから、五月になっても、不合格通知の来なかった人は、自分で当社に来てください」と言われた。

五月になって、不合格通知は来なかったが、私はすでに東京エクスプレス社に勤めていた。東京エクスプレス社、零細な旅行社である。社員は全部で十一人しかいない。海外旅行の手続きの代行をする会社である。ガデリウス商会の方が、ずっと条件がいい。仕事も技術関係の翻訳だから、東京エクスプレス社のように雑用ばかりなのとは違う。しかし、私が家でこの話をすると、母が怒った。

「面接のない会社なんて、ありません！」

そうか、やはりガデリウス商会もこれから面接をするのか、それならまた私は落ちるだろう... このまま東京エクスプレス社に勤めていた方が賢明だろう、とそのときの私はそう思った。

実際には、後でわかったことだが、私はガデリウス社に合格していた。始めからあきらめていたのがいけなかったのだ。それに、家では、母の権力が強かった。高校教師であった母は、生徒の就職の世話もしていて、その体験から、面接のない会社などない、と考えていたのだ。

私は就職先などどこでもいい、と思っていた。自分は作家になるのだから、会社勤めは腰かけだから、と不遜な考えを抱いていた。だから、東京エクスプレス社に勤め続けた。そのことで半年後に手痛い目にあうなど、考えてもみなかった。

秋になった。

その頃、まだお正月に海外旅行する人は少なかった。海外旅行は夏のものだった。秋になると仕事がなくなる.....

私は専務と常務の二人に、喫茶店に呼ばれた。

「どうだね、この仕事は好きかね？」

「はい」

「君は、この仕事に向いていないね」

「.....」

「君は自分の給料は一万五千元と思っているかもしれないが、会社は社会保険も雇用保険も年金

掛け金も払っているんだ。この分、君は会社に大きな負担を与えているんだ」

「それに、君の電話の対応は何だね。会社にとって重要なある人から、もう君は電話に出さないでくれって言われているんだ。そうすると、君は会社に莫大な損害を与えていることになるんだ」

電話の件で、思い当たるのは次のことである。

A校長は美術教師の間では、よく知られた人だった。毎年、夏休みに、美術の教師たちがヨーロッパの美術館めぐりをするツアーがある。それが東京エクスプレス社の売り物で、A校長がその元締めをやっていた。

ある日、他の社員のいないとき、電話がなった。

受話器を取ると、いきなり、

「キロク！」とどなられた。

一瞬何のことかと思い、あ、記録か、と気づいて、

「あ、美術ツアーに新しい申し込みがあったんですね」

「そうだよ」

「そうですか。では、その方のお名前など教えてください」

平身低頭に謝らなかったのが、いけなかったんだろうか？ 専務も常務も問答無用だった。

さらに二人は続ける。

「君は、日航や他の航空会社の女子事務員のことはどう思っているんだね？」

「私より大人だなって思います」

「なんだ？ あの子たちは、入社してから訓練を受けてあんななんだ。しかし、当社のほかの社員は、訓練しなくても、ああいう風になる。君が最初に面接に来たとき、野暮ったいなと思ったが、皆、訓練しなくてもああいう風になるから、君もそうなるかと思ったんだ。ところが、おかど違いだった」

「この仕事は、秘書のような仕事なんだ」

「秘書ってだれのですか？ お客の秘書ですか？」

「社長秘書だ」

「とにかく君はこの仕事に向いていない。辞めて、他の仕事を探した方がいい」

「法律で、社員を辞めさせるときは、一ヵ月前に通告するか、あるいは一ヵ月分の給料を払うかしなければならないから、君には一ヵ月分の給料をあげる。だから、今週いっぱい、来週から来なくていい」

「君があんまり酷いんで、他の女子社員に、忠告するように言ったら、皆、『あの人は人の言うことなど聞く人じゃありません』って言うんだ」

これは後で常務の作り話とわかった。

「君は、自分は他の女子社員、NさんやMさんやYさんとは違うって思っているんだろう？」

私は泣いてしまった。が、専務も常務も女の涙など、屁とも思っていないのだった。

他の社員たちも、私を責めた。

「あなたがちゃんと仕事をしないからよ」

ちゃんと仕事をしない……。命じられた仕事は、過不足なくやっていた。それ以上のものを身につけようとはしなかったが。何しろ、当時、私は軽いうつ状態にあった。昼間仕事をしているときは、なんともなかったが、夕方、仕事が終わると、深い虚脱感にとらわれ、ゆううつでしかたがなかった。そのうつ状態は、他の人には見えないものだったが。

「あなたは確かにこの仕事に向いていないわね」

「学校の先生になったら？ その方が、少しはあなたに向いているわよ」

「全部、あなたが悪いのよ。仕事って、あなたが思っているようなものではないわ」

秋になると、仕事がなくなる……。上司にすれば、社員の動揺は避けたかった。会社が悪いのではなく、私一人が悪いのだ、と、皆に思わせたかった。

私はあわてて、卒業まで通っていた高橋病院に行った。首切りにあった話をし、動揺していると告げた。

「夜よく眠れますか？」

「いえ、それが……」

「じゃあ、よく眠れるお薬を出しておきましょう」

こんな汚い会社において、よくも人を野暮ったいなどと言えるもんだ、と私は腹をたてていた。事務所は、多くの書類でごったがえしている。入社以来、私は一日もかかさず、一番早く出社して、事務所を掃除していた。そんな努力も評価されなかった。私は反抗して、以来、辞めるまで、一時間も早く出社して、朝、徹底的に掃除した。それでもわかってもらえなかった。

会社を辞めた。

(2) 田中病院

田中病院に行ってみよう、と私は思った。以前高橋病院に入院していたとき、同室の患者から「田中病院なら、患者の意思に反して入院させることはないよ」と言われていたのだ。

田中病院は、隣の町にあった。行ってみると、美しいバラ園に囲まれた瀟洒な建物だった。といっても、表側しか見えない。鉄格子に囲まれた病棟は、木々に遮られて見えないようになっていた。

待合室には大勢の患者が待っていた。そこで待つ。

しばらくして、私の番になった。医師は、院長だった。

私がか社を首になって以来、よく眠れないと言うと、院長が「入院しなさい」と言った。

このときは高橋病院では入院はすすめられていなかったのだ。

「私、入院するのは嫌です。それなら、他の病院へ行きます」

私は精神病院への入院は、高橋病院でこりごりだった。それに、その当の高橋病院では、入院する必要はなかったのだ。

「他の病院でも、同じだ」と院長は言う。

「人にはそれぞれしなければならぬ事情があるでしょう。たとえば、就職試験とか」

と言うと、院長は「落ちますよ」と笑った。

「わたし、この病院は嫌です。この病院は有名なよい病院だって威張っている、こんな病院は大嫌いです」

「ほほう」と院長は笑った。その笑い顔は終生、忘れられない。

「あなたがそうがんばると、こちらとしては鍵のかかる部屋を用意しなければならなくなるんですよ」

「私、帰ります」とハンドバッグを持って立ち上がると、院長は、それと手で合図した。

とたんに看護師たちが、私をむんずとつかみ、無理やり引きずっていった。

私は泣きながら「こんな風になるからいやだって言っているのに！」と叫びながら、病棟へ引きずっていかれた。

看護師たちは私をガチャンと鍵のかかる病棟に引きずり込み、さらにそこから独房に引きずって、ガチャンとまた鍵をかけた。

私がいったい何をしたというのだろうか？ ただよく眠れないから病院へ来たただけなのに、何で？

私は精神病院への入院はどういうときに行われるか、よく知らなかった。罪を犯したら、措置入院、あとは、自分で入院を承知するか、家族が入院を承諾するか、そのどちらかでなければ入院は行われぬ。家族はその場になかった。私は一人で病院へ来たのだ。家族に連絡することもなく、無理やり入院させた、そのとき病院は法律違反を犯していた。だが、私はそれを知っていなかった。

保護室と呼ばれるその独房は、板張りで、たたみ3畳ほどの広さだった。ベッドはなく、せんべい布団が敷いてあった。トイレもなく、部屋の隅に便器が一つ、置いてあった。昼間なのに真っ暗で、天井の照明は消されていた。

他にも同じような部屋が並んでいるらしく、看護師たちの足音がする。隣の部屋には、男の患者が入れられているらしかった。

「さあ、水をあげましょうね」と言う看護師の声がする。

私も、のどがからからに渴いていた。

「私にも、水をください。水をください」と言うと、

「あら、コップがないじゃない。コップがなけりゃ、水はあげられないでしょ」と、スタスタ行ってしまった。

何時間かたって、看護師が夕食を運んできた。

私が便器を指差して、こんなのと一緒ではとても食べられないと意思表示すると、看護師は「なれますよ」と言って、去っていった。

とてもものを通らない食事を、無理にお腹に押し込んだ。

夜になった。天井の照明が赤々つく。ここでは、昼間は暗く、夜になると照明がつくようになっていた。これでは眠れないではないか。

看護師が薬を持ってきて、睡眠剤も飲ませる。薬の力で眠らせ、ときどき窓からこちらを見て、寝むっているかどうか、調べる。それを調べるために一晩中照明をつけておくのだった。

私がこの病院に来たとき、軽い躁状態にあったのは、事実だった。ふだんよりおしゃべりで、にぎやかになっていた。そして、無理やり入院させられて、躁状態は酷くなっていった。

保護室という名の鍵のかかった部屋で、何をすることもなく、何が出来ることもなく、時間だけが過ぎていった。部屋の便器に用を足せという……私は酷い便秘になっていた。看護師がときどき来て、食事や薬を持ってくる。とうてい食欲もなかったが、しかたなく食事は摂っていた。薬は……薬を飲むことを納得していたわけではなかったが、拒否するとまたも恐ろしいことが待っているようで、これもしかたなく飲んでいた。囚われの身になったら、どうするか。ここではただ静かにしていればよいようだった。

二、三日して、看護師が着替えを持って来た。家から届いたようだった。着替えると、部屋の外に出してくれた。

そこにこの病院の女子の閉鎖病棟があった。

狭いホールに食堂があって、その隣にいくつか部屋がある。部屋といっても、扉もなく、廊下からつつぬけなのだ。それらの病室にぎっしりとベッドが並べられている。私物を置く棚もあったが、そこも狭く、皆の物がぎっしりと置かれているので、自分の物がどれか、判別しづらい。

後になって、私は着替えが次々と見えなくなることがあった。

「なんで私の着替えが次々となくなるんですか？」と看護師に聞いたら、

「それはあなたに自分の物を管理する能力がないからです」と言われた。

物がごちゃごちゃと置かれているので、判別できないのだ。

ベッドとベッドの間に、隙間もなく、夜も昼も自分にあてがわれたベッドの上ですごすしかない。ここでも何もすることがなく、退屈な時間が過ぎてゆく。保護室と同じく、昼間は薄暗く、夜になると廊下にこうこうと灯りがつく。ここでも睡眠剤を飲ませて、無理に眠らせるのだ。

見るからに狂っていると思われる患者もいた。が、多くはどこが悪いのかさっぱりわからない普通の人々だった。

閉鎖病棟は外部から頑丈な鍵で隔てられていて、他の人は入ってこれない。病棟から廊下を通っていくと、面会室があり、家族とはここで面会できる。ただし、これは入院して二週間たった患者のことで、新しい患者は、一律に二週間、誰とも面会できない。

なぜ二週間なのか？ 好意的に考えれば、二週間もたてば病状が落ち着くから、ということだが、悪意を持って考えれば、軽い病気で入院しても、二週間も閉鎖されていれば、病気が固まって固定化するから、入院を家族に納得させることができる、ということになる。無理やり閉じ込められたことで、私の躁状態は酷くなっていた。

指折り数えて待った二週間。とうとう母が来てくれた。果物を持って来てくれた。それを食べながら、私は母に、この次に生理用品のタンポンを持ってきてくれるように頼んだ。

「ここでは買えないの？ ママは、お前のお小遣いをちゃんと入金したんだけど」

「決まったものしか買えないのよ」

ここではナプキンを買えるが、タンポンは買えないのだった。しかし、私は出血量が多く、ナプキンだけでは下着が汚れてどうしようもなくなるのだ。これが入院中の悩みの一つだった。

「院長先生にもお会いしたけれど」と、母は言った。「院長ともなると、病院の経営のことを考えるんだね」

入院患者を多く抱えていれば、病院の経営は安泰である。だから患者を入院させ、なかなか退院させないのだ。

これ以来、母は、毎週日曜日に来てくれるようになった。

病院の患者には二種類あった。一種類は、私のように、家族がどんどん面会に来てくれる人たち。この人たちは、割合早くに退院できる。もう一種類は、家族が面会に来ない人たち。この人たちは退院できず、病院にどんどん沈殿していく。だいたい新しく来た患者は、前の分で、ずっと前からいる患者は、後の分である。そして沈殿していく患者たちの中には、少なからず社会的入院患者がいるのだった。

社会的入院.....当時はこういう言葉はなかったが、実態はあったのだ。病気が治って、もう病院にいる必要はないのに、家族が引き取らないので、病院にいる。

「退院するには、先生がいいって言うだけじゃダメなのよ。家族がいいって言わなけりゃダメなのよ」と、患者が言った。

引き取らない家族にも、言い分はあるかもしれない。精神病など忌まわしい病気になった家族は、病院に隔離しておきたいかもしれない。しかし、入院費用は支払いに来て、そのとき面

会しようとはしないのだ。家族に見放されて、患者は一生、病院に閉じ込められてしまうのだ。もともと家族に愛情がないから、心を病むようになったのだろうか？

篠原玲子は、誰とも交わらなかった。いつも一人で寝ている。ときどき起きて、廊下を歩き、「ああっ、あーん、あーん」と泣く。

彼女は、もう何年もこの病院に閉じ込められているようだった。泣きたい気持はわかる。

「あなた、どうして退院できないの？」と私は彼女に聞いてみたことがある。

「うちの親は、理髪店を経営していて、私に、家で何もしないでいるのはダメだよって言うの。退院するなら、理髪店の仕事を手伝わなければダメだって。私は理髪店の仕事が嫌いなの。だから、それをするより、ここで遊んでいた方がいいかなって思うの」と彼女は答えた。彼女の親は、たまに来て、そう言ったのだろう。

「あなたは、外の社会に出るのが怖いんじゃない？」と訊いたら、彼女は、

「あなた、私の気持がよくわかるね」と言った。

病院に渋谷忠子が入院して来た。

「あのね、あのね、今度の人、妾なんだって」とくちさがない橋田多美がやってきて、言う。

「ほら、ここに荷物があるでしょ」

忠子自身は、保護室に入れられているようだった。

彼女の荷物には、色とりどりの華やかなネグリジェやパジャマがいっぱいあった。

「ほら、妾だからこういう物を持っているのよ」

「そう」

「ね、勉強になるでしょ」

翌日、また橋田多美がやってきて、

「違うんだって。妾なんかじゃないんだって。ご主人がいるんだって」と訂正した。

渋谷忠子自身が、保護室から出てきた。

「私、渋谷じゃなくて、中里になったのよ」と彼女は言う。

「私は、中里の愛人だったの。でも、奥さんが騒いで、私は身を引いたの。そうしたら、今度は私の方がいいって、言って来たのよ。奥さんはもう、男を家に引き入れているんだって」

「それであなたは悩んだのね」

「うん。ノイローゼになっちゃって。中里が私をこの病院に連れてきたの」

忠子は一時的にノイローゼ状態になっただけらしかった。まもなく、中里氏に引き取られていった。

この病院の特徴の一つは、退院の基準が明確でないことだった。

一ヵ月ほどで、私の躁状態は落ち着いていた。しかし、よくなったのに、退院どころか、外出も外泊もさせてもらえない。母は頼んでくれたが、院長は「まだ早い」と言うばかりだった。

なぜだろう？……よくなったのになあ、と思う。その思いがつのると、うつ状態がやって来る。躁状態とうつ状態とが繰り返すのが、私の病気、躁うつ病。といっても、躁状態の次に必ずうつ状態が来るとは決まったものではないのに、入院中、躁状態が終わっても退院させてもらえぬため、うつ状態が始まる。そして、なぜか、うつ状態が固まって、固定化すると、退院になる

のだった。軽うつ状態で、躁状態に転化する恐れもないときには、退院させていい、ということだろうか。

私は他の病院に行こうと思えば行けたのに、なぜか、この田中病院に縛られていた。退院後も、この病院に通院していた。ただし、担当の先生は、院長から臼田先生に変えていた。臼田先生の診察の日に通院した。これは母の勧めによる。

臼田先生は、患者を割合早く退院させてくれる。それでいつも院長に叱られている、と病棟の患者たちは噂していた。

そして、これから何年間も、私は田中病院に入ったり出たりを繰り返した。

(3) 荒れた学校

退院はしたけれど、私は、職もなく、失業状態だった。ゆううつが私を苦しめる。このまま、親の厄介になって、一生を過ごすのだろうか？ もう一度、働くことはできないだろうか？ ゆうつではあったが、働く意欲はあった。

「お前、教師の臨時採用試験を受けてみないかい？」と母が言った。教師の採用試験は、大学時代に受けて、落ちていた。もう一回挑戦してみたらと、母が勧める。母は、県立高校の教師をしていて、そういうコネならあった。

「私、教師になるだけはいや。小中学校時代、ろくでもない教師たちにいじめられていたから、教師にだけはなりたくない」

「それは、お前、お前がそういう教師にならないで、いい先生になればすむことじゃない」と言われ、それもそうかなと思った。

私は臨時採用試験を受けた。試験は簡単で、合格した。

県立の養護学校の口と、市立の中学校の口と、二つ、どちらかを選ぶように言われた。

「養護学校は難しいよ」と母が言う。

「同情なんかでやっていけないだよ」

健常児の教育が難しくない、ということはなかったのに、母はあたかも健常児の教育なら簡単だとも言うように、私に勧めた。私は母に支配されていたから、それに従った。

昭和四四年の秋、私は隣の市の中学校に英語教師として、勤め始めた。そこが市でも名の知れた荒れた学校であるなど、知らなかった。

後に友人に言われたことであるが、「あなたは、学校時代、教師にいじめられたと言っているけれど、自分が教師になったときは、なぜ、そういう先生じゃなく、立派な先生になろうとはしなかったの？」ということであるが、現在の学校で、心構えだけで立派な先生になれるわけではないのだ。学校自体が荒れているので、それに対応できる技量がなければならない。大学を出ただけで、そんな技量が備わっているわけではない。どこかでそれを学習しなければならない。私はそれを学習するのに、何年もかかった。

私は始め、自分が授業をすれば生徒はそれを聞いてくれるものと思っていた。とんだ当て外れだった。生徒たちは、ぺちゃくちゃいらぬおしゃべりばかりする。どうしてそんな私語ばかりするのか、よほど重要な話でもあるのか、と不思議になるくらい、勝手なおしゃべりにうつつをぬかす。教師の言葉など、聞いていない。

生徒というものはそういうものなのだ、という前提で対処しなければならないのに、私にはそれができなかった。どうしていいのやら見当もつかない。

生徒たちにすれば、英語や数学など、まず、おもしろくない。聞きたくない。一部の生徒は、受験が頭にあるから、英語を身につけようとはする。でも、他の子供たちがぺちゃくちゃ騒いでいるから、教師の言葉が聞き取れない。先生が悪いんだ、先生がちゃんと教えてくれないから、皆が騒ぐので、とにかく先生が悪い、ということになる。生徒には二種類あって、ぺちゃくちゃ騒ぐ生徒、そして自分はそんなに騒がないが他の生徒たちが騒ぐので英語が学習できず、指導力

のない教師に不満を持つ生徒、の二種類である。

しかし、いくら生徒たちが騒いでも、決められたカリキュラムはこなさなければならない。私はずんずん授業を進めていった。そして、生徒たちの評判が悪い割には、その成績はそんなに悪くはなかった。授業をしなかったわけではなかったのだ。

しかし、あの先生はダメだ、ダメだ、と言われ続け、学年主任には怒られ、教科主任には何も教えてもらえず、母親たちの叱責までかった。主任は、怒ってばかりで、ではどうすればいいのか、教えてくれない。母親たちが教育委員会に押しかけて、あの教師つまり私を何とかするよう要求した……これは、私は、校長から聞いたが、校長も教育委員会も、どうすればいいのか、指導してくれなかった。

私は、次第に、メランコリーになった。ゆううつで、無気力で、しょうがない。事態に自分から立ち向かっていくのではなく、なるがままに任せていた。何年も、うつ病が続いた。

そして、ときどき、うつ病が躁転する。躁病になって、入院させられる。教師は半年間、病気休暇がとれる。私は何回か病気休暇をとらなければならなかった。

英語教育の新しい潮流にふれたのは、そんなときだった。日教組の教研集会でである。

訳読式から自己表現へ。私は中学校から大学まで外国語教育を受けて来たが、いつでも、授業は訳読式ばかりだった。英語を、読んで、日本語に訳す、それを中心とする。それしか知らなかったから、英語教育はそういうものだと思っていた。そうじゃない、英語で自分を表現できるようにすることこそ、新しい英語教育なのだと、私は初めて知った。そこで授業をいろいろ工夫してやってみた。試行錯誤はあったが、展望は開けてきた。

この頃よくなったね、と母たちからも言われ、教師仲間からも言われた。私は明朗闊達になった。仕事もすべてとんとん拍子にうまくいく。どんどん良くなる……それが病気の始まりとは思わなかった。

最初の学校から、次の学校へ転任して、その転任をきっかけに私はまたも騒ぎ始めた。世の中が自分中心に回っているような気になった。

そして入院。このとき、臼田先生は、転任してもう田中病院にいなかった。代わりに診てくれたのが、谷川先生だった。谷川医師と私との、不幸な運命の出会いが、ここにあった。

そして入院。このとき、臼田先生は、転任してもう田中病院にはいなかった。代わりに診てくれたのが、谷川先生だった。谷川医師と私との、不幸な運命の出会いが、ここにあった。

(4) 谷川先生

「入院なんて嫌！」と泣きじゃくる私を、谷川医師はやさしく肩を抱いて、病棟へ連れていった。

臼田医師が転任してから、その代わりに来たのが、この谷川医師だった。働き盛りの四十代、どこまでもやさしく、ソフトで、人当たりのいい医師だった。

病棟内では、「谷川先生は薬が多い」「谷川先生は退院させてくれるのが遅い」「谷川先生はヤブだ」といううわさがあった。四十代のベテラン医師のはずだったが、自分で言っていた。「ぼくは外科医だったんですよ。でも、外科は身体を使うから、大変で、精神科に切り替えたんですよ」年の割には精神科の経験が不足していた。

彼は、私に教師を辞めるように言った。教師は心の病になりやすい職業だから、辞めるようにと。

「ぼくのところにも中学生の息子が一人いますが、もう反抗期で、大変でね。あんなのが大勢いたら、先生はもう大変だろうって思いますよ」そして「うちの子はK中学に行っているんですよ」と息子自慢も忘れない。K中学がどうだっていうのか。東大合格随一の名門中学か。だからどうだっていうんだ。私はそんなことに興味はない。それでも谷川医師が素朴な人だってことはわかった。

半年で私は躁状態を脱して退院できるまでになったが、谷川医師が教職に復帰させてくれなかった。自宅療養のまま、休職扱いになってしまった。

校長が行くと、谷川医師は「この人は教師に向いていませんね」と言った。校長が辞めさせたがっているのを、認めていた。

私は、一月に一度、給料日に、学校へ行かなければならない。そこで校長に挨拶に行くと、いつも言われた。谷川先生の言うことを聞いて、教師を辞めるように、と。

「あの校長は冷たい人だね」と母が言う。「お前を辞めさせると、手柄になるのかねえ」

谷川医師に、これ以上、教師を辞めさせるべきだと言わないでほしい、と頼んだが、「ぼくの立場もありますからね」と拒否された。

私はじっと黙って耐えていた。

うつ病が身体を蝕む。校長が壁になって、私の行くてを阻む。膠着状態のまま、黙って耐えるしかない。

休職は最大三年間できる。私は一年目も二年目も、ただ黙って耐えていた。せっかく教師として立派にやってゆける方法をつかんだのだから、それを貫きたかった。教育への情熱も生まれていた。そして、何よりも安定した仕事を失いたくなかった。

でも人生は職業に生きることばかりだろうか？ という疑問が生まれてくる。結婚して専業主婦になる、そういう生き方もあるのではないか？ 女は人生につまずくと結婚に逃げようとする、それはわかっていた。でも、それがいけないと、一概に言えるだろうか？ 逃げる道があってもいいのではないか？

問題は、私が病気だということだった。

「病人と結婚する者はいない」と父は言った。

「お前と結婚してくれる人がいたら、私はその人に、命の他は何でもあげますよ」と母は言った

。絶望的な状況。でも、私は結婚したかった。結婚したいと思いながら、二十代を過ごしてしまった。三十代になって、私はあせっていた。条件を下げよう、と思った。離婚して子供を抱えた父子家庭の男性なら、私を受け入れてくれるかもしれない。結婚には愛情が必要と思ってきたが、「好き」でなくても「いい人だ」と思って結婚してもいいのではないか。結婚相談所に行こう、と決めた。学校の方は、あっさり辞めた。

結婚相談所で何人かの人と見合いして、最終的に決めたのが、橋川正造だった。

彼は、三十代のサラリーマンで、妻と離婚して息子を一人育てていた。彼と共働きしていた妻は、職場の男性と親しくなり、夫と子を棄てて恋人の許に走ったのだ。

「家庭的な人がいい」と彼は言っていた。

家庭的ってどういうことか？ 一生専業主婦でいなければならないのか？

「子供が大きくなったら、働いてもいいですよ。ぼくはそういうことは気にしません」とも彼は言った。

病気のことは……何もかも隠して結婚するのはフェアじゃないように思えた。

「私、神経症になったことがあって……」と少し小出しにしてしゃべった。

「ぼくも離婚したことがあるし、気にしませんよ」とそのとき、彼は言った。

でも、その次に私が彼に電話したとき、彼はデートの誘いに応じなかった。

「それは……この前、病気のことを言っていたから……」

「そうですか。わかりました」

やはり病気のことはまずかったのだ。私はあっさり引いた。

その数日後、彼から電話があった。

「やっぱり、ぼくと交際を続けてくれませんか？ ぼくも、いろいろ考えたけれど……」

よかった！ 彼は私に好意を持ってくれたのだ。

彼の息子は、四歳の保育園児で、とてもかわいい子だった。この父子となら、うまくやっていけそうだった。彼に恋したわけではないが。

ただ結婚となると、その前に解決しておくべきことがあった。

病院に行ったとき、谷川医師に言ってみた。「私、結婚する前にはっきりさせておかなければならないことがあるんですけど」

「何だね？」

「好きな人がいるんです」

「え、誰？」

「先生です」私は谷川医師を尊敬し、信頼し、恋してもいた。いろいろあったけれど、先生はいい人だった。

「それは……先生には奥さんがいるんだよ。不倫はよくないから。ごめんね」と先生は答えた。

結婚して、専業主婦となる。

性の喜びはなかった。以前どおり田中病院に通って、谷川先生に「結婚しましたが、性の喜びはなくて」と訴える。

先生は、それに対して、「離婚しない方がいいよ」とにこにこ答えた。

私は始め、埼玉県の彼の家に行ったのだが、半年後、千葉市の私の両親の家の近くに引っ越した。母が、面倒をみてあげるからそばに来てほしい、と言ったので、彼に異存はなかった。

息子は、新しい家の近くの幼稚園に入れた。次の年に小学校に入学させた。

静かな時が過ぎていった。

(5) 昭和54年春

結婚して、夫の給料で過不足なく暮らし、息子は私になついてくれた……幸せを絵に描いたような生活が続いていた。それなのに、私はなぜか酷い疎外感に苦しんでいた。今の状態が幸せとは思えない。胸のうちに不満が渦巻き、それが何の不満なのか、自分でもわからない。なんとか今の状態から脱したい。ではどういう状態になれば幸福感が得られるのか、それがわからない。いったい自分はどうなってしまったのだろうか？

私はウーマンリブの運動に近づき、女性学の本を読み漁った。主婦の自立……精神的自立、経済的自立……女はほんとうは何を求めているのか？ 経済的自立なくして精神的自立なし、なのか？ 三十代の半ばにきて、これからの人生をどう過ごしていったらいいのか？

ある日、母に言った。「私、働きたい」

「お前は興奮している」と母が言う。「一緒に病院に行こう」

田中病院に通ってはいたが、その日は通院日ではなかった。私が現在正常な状態にあるのは、担当の谷川医師ならわかっているだろう。母の過剰な心配は、医師に任せておこう、と思った。

「今日は病院に行く日じゃないわ」

「でも、お前は興奮しているから」

「そんなに心配なら、自分一人で病院に行って、先生に相談しなさいよ」

母を一人で病院に行かせた。そのとき、まさか母が、うちの娘はこんなことをやった、あんなこともやった、と過去、私が病気だったときにやったことを、あたかもこのときにやっているかのようにぺちゃくちゃおしゃべりするとは思っていなかった。母の訴えることを現在の私だと医師は誤解したのだった。

病院から帰ってきた母は、一枚のメモを私に見せた。先生の字で書いてあった。

「春は病気になりやすいです。お母さんも心配しておられます。一度病院に来てください」

先生は母のことを心配しているのではないかと私は思った。私が現在正常なのはわかっているはずだ、と。

でも、翌日、母と病院に行った。

「私は働きたいんです。専業主婦として一生を終わるのは嫌なんです。この気持、わかっていただけますか？」

「わかりますよ」と医師はにこにこして言った。精神科の医師はうそつきである。

「注射しましょう」と、なぜかこのとき、医師は私に安定剤の注射をした。そして「もう一時間、待合室で待っていてください」と指示した。

待合室で待っていると……私は妄想の世界に引きずり込まれていった。なぜか異常に興奮してくる。夢の中を歩いているような気がしてくる。それが、注射のせいだとわからない。

一時間して、診察時間の最後に、また呼ばれた。

「どうですか？ 今度はどんな気がしますか？」

「どんな気がするって……私は、社会に出て働きたいんです。でも、それを理解してくれない人がいるから……」私は泣き泣き、訴えた。

「少し、入院した方がいいようですね」

「えっ、入院？」私は驚いた。そんなことは考えてもみななかったのだ。

「なぜですか？ 私は、これまで躁病で入院することが多くて、自分で判断してきたんです。躁病になると、本が読めなくなる。あれも読みたい、これも読みたい、といっぱい本を買ったりするけれど、腰をすえて読むことができなくなる。逆に、本が読めるときは、私は大丈夫なんです。今は読めます。ですから、今は大丈夫なんです」

だが、谷川医師はにこにこ微笑しながら「君は躁病だ」と断定する。

「本が読めてもですか？」

「そうだ」

「こんな環境の悪い病院に入院したくはありません」

「短い間だから、我慢しなさい」

しかし、事務の入院手続きで手間取った。

「ご主人がいるんですね」と事務員が言う。「ご主人がいる場合、その許可が必要になるんですよ」

「私、橋川の判子なら、持っています」と私はやぶれかぶれで言った。

しかし、母は、まさか入院になるとは思っていなかったのも、必要な保証金五万円を持っていなかった。

「では、月曜日にまた改めていらしてください」と事務に言われた。その日は土曜日だった。

日曜日、私は息子を連れてデパートへ行った。息子の好きなハンバーグを食べさせてやって、静かにさとした。

「お母さんは、病気だから、しばらく入院するからね。あとのことはおばあちゃんが面倒をみてくれるよ」

眠れぬ夜もなかったのに……。

(6) だんだん悪くなる……

閉鎖病棟に入れられて、薬をいっぱい飲まされて、私はだんだん悪くなっていった。閉鎖されたことで一時的に悪くなったのではない。与えられた薬を飲むと、飲めばのむほど、悪くなっていく。躁状態というのとは、少し違う。気持がどんどん荒んでいく。生活態度も、荒んでいく。少なくとも、躁状態のときは、気持が明るかったのだ。今度は、気持が暗くよどんでいく。

それでも私は谷川医師に恋していた。信頼もしていた。だから指示通り薬も飲んでいたので。一ヵ月たった。

面会に来た夫が聞いた。「眠れるのかい？」

「眠れるんだったら、ここから出してやるよ」

後に夫が言っていたが、彼はこの入院はおかしい、と思っていたようだ。

問題の母も、おかしいと思っていた。「私がなぜ入院させたのですかと先生に聞いたら、『とてもいい注射をしたのに、おさまらなかったから、入院させたのだ』と言われたんだよ」と母も後で言っていた。

とてもいい注射！ 私を妄想の世界に引きずり込んだあの注射。

そして毎日の大量の服薬。

それでも私はまだこの医師に幻想を持っていて、このとき、夫や母に頼んで退院させてもらおうとはしなかった。なんとか医師に自分をわかってもらおうとしていた。しかし、

「先生って、すごい権力を持っているんですね」と言った私に、谷川医師は、「権力って？……権力じゃないよ。先生は奥さんがいるから、君を好きになってもダメだけれど、そういった気持でいるんだよ」と答えた。そして私をじっと見つめて「愛しているよ」と言った。

もうこうなったら、そう言われても私はうれしくもなかった。あ、そうだったのか、と思った。この先生は無意識のうちに私を夫の許に帰したくないと思っているんだ、と気がついた。薬で気持が荒んでいくうちに、担当の医師に対する信頼の気持も消えていこうとしていた。

「いったいつまで我慢しなければならぬんですか？ 先生は、短い間だから我慢しなさいとおっしゃったじゃないですか？」

「短い間さ。十年ってこともあるんだから、それに比べれば」

ひどい、と私は思った。

「私の病気は軽いじゃないですか」

「軽いんじゃない。固まってしまっているんだ」

固まっているって、家にいたとき、私はもっと良い状態だったのに。私は悲しかった。

そんなとき、医師が昼間私を呼びに来た。やさしく肩を抱いて、保護室に連れて行こうとする

。「電気ショックなんて嫌です」と私が拒否すると、

「電気なんかかけないよ」と言って、保護室で私に麻酔をかけた。

保護室で目が覚めると、看護師がやってきて、保護室から出してくれた。あ、やっぱり電気を

かけられたんだな、と思った。患者にも家族にも無断でこんなことをしていいのだろうか。

私はますます心が荒んでいった。生活態度もめっちゃめっちゃになった。乱暴するわけではないが、いつもイライラ、ギスギスしていた。

「愛しているよ」と医師は言ったのだ。その愛情のために、私に大量服薬させ、なんと電気ショックまでかけたのだ。この先生に担当してもらっていたら、私は永久に外に出られないのだ……と私は考えた。どうしよう、何とかしてこの先生から離れなければ。だいたい、この大量の薬！これを飲むごとに私の心は荒んでいくのだ。

「薬が合わない」と私は看護師に訴えた。

「薬が合わないんです」と、何度も何度も訴えた。

私がしょっちゅうそうがんばるものだから、うるさくなった看護師は「じゃあ、他の先生に診てもらいましょうね」と私を他の斉藤医師に会わせた。

だが斉藤医師は、「あなたはさわやかな顔をしていますね。薬の合わない人は、そんなさわやかな顔はしていないものです」と決め付けた。さわやかな顔？ 私は斉藤医師に助けてもらえるかと思って、「さわやかな顔」になったのではないか？

他の先生に診てもらわなければ。しかし、どの先生なら私を助けてくれるんだろう？

病院の仲間に聞くと、「そりゃ、花島先生が一番だよ。花島先生なら、厳しいけれど、愛情があるもん」ということだった。

私は面会に来てくれた父親に頼んだ。花島医師の担当に変えてほしい、他のことならなんでも聞くから、谷川医師だけはもう嫌！ とがんばった。

父が、谷川医師、花島医師と、話をつけてくれた。

花島医師は、全く違う薬を出してくれた。

そして私は、みるみるよくなって、退院できた。

(7) 愛

ずっと後になって、精神医学の啓蒙書を読み漁っていたとき、私は、患者は精神科医を愛してもいい、だが精神科医は患者を愛してはならない、という規範のあることを知った。恋愛感情があると、患者のことを客観的に見られなくなる、ということらしかった。

人々は、医者が患者を愛することがあるなどとは、考えない。私は、谷川先生が、私を愛していると言ったとあって、若い女性の看護師から叱られた。「谷川先生が、あなたを愛しているって言うわけないでしょ」と決め付けられた。

花島医師もそうだった。

「谷川先生が君を愛しているって、君は、先生がなんでそう言ったのかって思うの？」

「知りませんよ。私がそう言ったのではなく、谷川先生がそう言ったのですから、それがなんでかは私にはわかりません。谷川先生は、私を退院させたくなかったんでしょう。私を夫の許に帰すのが嫌だったんじゃないですか」

「谷川先生がそんな人だとは思えないね」

この会話は退院して、何週間かたったあとのことである。私を入院させて大量の薬や電気ショックを受けさせたのは医療ミスだと言う私に、花島医師は言った。

「医療ミスだと思うなら、裁判に訴えればいい、小説に書いて、告発すればいい、私は君に、医療ミスではないと自覚させようとは思わない。文句があるなら、もうここへ来なくていい、君はなんでここに通院してくるの？」

「それは、私は病気になりやすいから」

「それ見なさい。私は、君がここに来なくなっても、君を何とかしようとは思わない。君をこれ以上何とかしようなどとは、ぼくは考えない。だから、来たくないなら来なくていい。文句ばかり言われるのは、不愉快だ」

来たくないなら来なくていい、と言われて、私はそれでもあと二、三回花島医師の許に通院していたが、それも止めてしまった。田中病院とは縁を切った。そのあと、やはり病気が再発して他の病院に行ったりしたが。

それでも花島医師が私を助けてくれたのは事実だった。花島医師に病院から解放してもらってから、私は母を電話でなじった。

「ママは、あのとき、先生に何て言ったの？ 私は、あのとき、『働きたい』って言っただけよ」

電話の向こうで、「ヒュー！」という声がした。

母は、後々まで「お前が病気になって、私は苦しんだんだ」と何度も私を非難した。

「そう。それなら、先生に向って、あの子はこれをした、あれをしたと、おしゃべりしなきゃあよかったじゃない」

「そうかい……」

母はそれ以上言わなかったが、私に謝罪することはなかった。その後、一言の謝罪もなく、ガ

ンで亡くなった。

夫は、「ぼくはおかしいと思っていた」と言った。「君は過不足なく家庭生活を送っていた。入院する必要はないと思った。で、ぼくが病院に面会に行ったとき、君はうまくろれつが回らないようだったから、あ、薬でこうなったんだなと思った」

私は夫に訴えた。

「私、今回は病気じゃないのに、入院させられて。ただ働きたかっただけなのに。先生を信頼していたのに、裏切られて」

親や医師に頼らず、夫に頼っていたら、このとき入院しなくてもよかったのだ。

「もうそのことは忘れよう」

と、私をなだめて、夫はそれ以上何も言わず、私を抱きしめてくれた。

「私、働きたい」

「働きたければ、就職試験を受けてみればいい。息子も大きくなったことだし、ぼくは反対しないよ」

理解のある夫だった。

私を雇ってくれる会社はあるだろうか？

私は、新聞の折込広告で、いくつか会社をあたってみた。そして、中学生向けの教材を作っているE社に採用された。

新しい共働き生活が始まる。

会社は近くにあり、定時に帰宅できたから、主婦としての仕事にも困らず、うまく共働きできた。かねがね「君が働いてくれたら、ぼくも半分家事をする」と言っていた夫だったのに、実際に共働きがスタートしても、家事の手伝いは何もしてくれなかった、それが不満だったが。

不満は口に出さなければ、解決しない。

「お茶碗くらい、洗ってちょうだい」と頼んだら、夫は食後の食器洗いはしてくれるようになった。

愛ってどこにあったらうか？

愛は、夫の許にあった。

灯台下暗しというべきか。愛情がほしいからとて、妻子のいる精神科医に恋することはなかったのだ。

ヤブ医者に恋したとき、そこにあったのは、医療ミスだった。妻子ある人を恋するなんて、それで私は罰を受けたのだろうか？ もっと早くから夫の愛を信じればよかったのだろうか？